

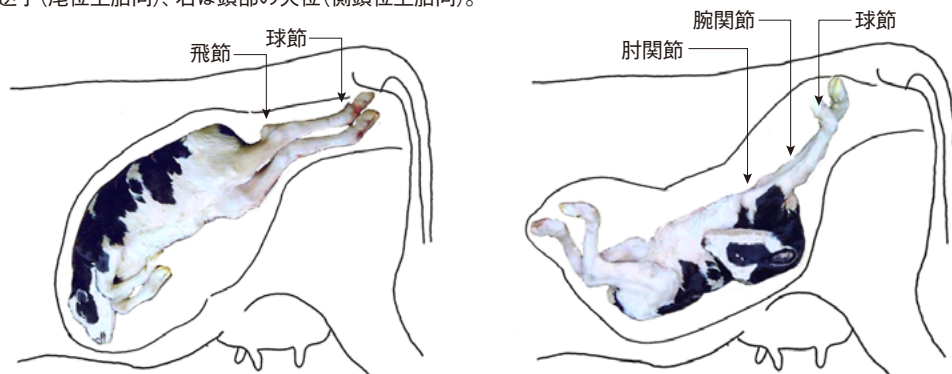
きているうちに速やかに帝王切開を選択すべきでしょう。しかしながら、実際に胎子過大、産道狭小が原因で帝王切開が必要な症例は極めて少なく、多くの症例で、時間の経過とともに産道が緩み、産道を通して産ませることができるようになります。外陰部に足胞が現れてから、少なくとも経産牛で1時間、初産牛では2時間は待つ必要があります。この時点でも、胎子に活力があり、努責間隔が5分以内で少しずつ分娩の進行が見られる場合には、さらに待つべきでしょう。

助産する場合に最も重要なことは、「いかに力を使わずに介助するか」であり、決して「引っ張り出す」という意識を持つてはいけません。助産前に産道粘滑剤を注入し、胎子や産道に十分に塗ります。母牛の努責に合わせてゆっくりと牽引します。術者の腕や拳、胎子の頭や脚などにより産道を時間をかけて拡張し、少しずつ牽引します。牽引しても動かなくなったら、いったん子宮内に押し戻し、胎水や粘滑剤を再度塗った後に牽引します。これを繰り返すことで徐々に分娩は進行していきます。

もし、まったく進行が認められない場合には、子宮内に押し戻した後に、胎子失位や奇形がないかどうか、もう一度、よく確認してみましょう。後肢だと思って引っ張っていたのが前肢であり、頭が失位している、あるいは前肢と後肢を同時に引っ張っている、双子の片足ずつを引っ張っているなど、よく聞く失敗です。子牛の飛節と前肢の肘関節は、よく間違われます。前肢は、肘関節までに屈曲可能な球節と腕関節の2カ所があり、後肢には飛節までに屈曲可能な関節は球節のみ1カ所です（図23）。

図23 間違えやすい逆子と頭部の失位

左は逆子(尾位上胎向)、右は頭部の失位(側頭位上胎向)。



### 難産が新生子牛に及ぼす影響

難産が新生子牛に及ぼす影響については第4章において解説しましたが、その概略について、改めてここで整理します。